

受付番号

11-013

留学・研究計画書

氏名 平野 鶴子	留学機関名 ソウル大学校
留学先国名 大韓民国	留学期間 西暦 2012 年 3 月 ~ 2014 年 2 月
研究テーマ 植民地期朝鮮における衣生活の近代化	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>1. 研究の目的と問題の背景</p> <p>研究目的は、植民地期朝鮮における衣生活の実態を社会経済史的な角度から明らかにすることである。とりわけ、日本本国と朝鮮における繊維産業の展開と生活改善運動との関わりに注目する。先行研究により、当時の朝鮮では、鉄道輸送の拡大に伴い地方末端の在来市場に至るまで日本本国の繊維製品が朝鮮全域に流通しており(橋谷弘)、一方、日本本国への供出を目的とした棉作奨励が広く行われ、朝鮮は原料供給地としての役割も負わなければならなかった(松本武祝)ことが明らかにされている。しかしながら、これらの研究では、植民地朝鮮は日本本国に収奪される被支配者としてしか叙述されておらず、当時の社会経済状況下で朝鮮人が実際の衣生活においてどのように対応したのかは未解明であると言わざるを得ない。そこで、申請者は、単に日朝の繊維業界の動きに注目するだけではなく、植民地期を通じて官民両側から展開された生活改善運動(衣食住にわたって生活の近代化、科学化を図る運動)に注目する。この運動は社会政策の一環であると同時に、朝鮮人による主体的な運動でもあった。同運動と経済界の動きとの関わりにおいて当時の衣生活の実態を明らかにすることで、「支配と抵抗」という二項対立的な歴史観に偏重してきたこれまでの朝鮮近代史研究の見直しを図る。また、方法論においても、文献による一次調査に加え、聞き取り調査を取り入れることによって、これまで十分に論じられてこなかった生活者の実態を解明すると同時に、近代朝鮮の新しい枠組みを提示したい。</p> <p>2. これまでの研究内容と研究課題</p> <p>申請者は、修士論文において、衣服の主要な布地として用いられていた綿織物の流通構造について、①1930年には全羅南道でも工場製品が飛躍的に広く流通しはじめていたこと、②工場製品の流通が、それまでにはなかった多様な商品流通をもたらし、農村部においても新しい需要を形成したことを明らかにした。博士課程入学後は、生活改善運動と衣生活の関わりについて解明すべく研究を進めている。具体的には、①同運動の衣生活の分野で最大の焦点となった「色衣」奨励運動(染色された衣服の着用を奨励する動き)の展開過程、②「色衣」奨励運動に対応する日朝の染色繊維業界の動き、③共同洗濯場の設置された背景、の三点を分析する。</p> <p>3. テーマの意義</p> <p>本研究は、学術的には植民地期朝鮮の社会状況の解明に一石を投じる。韓国では、社会学や文学の分野を中心に当時の朝鮮人の生活に関する研究が進展している。そのような研究が不足している朝鮮近代史研究に生活史関係の事例を提供する。当時の人々が営んだ日常生活の実相を浮かび上がらせようとする本研究は、多様な歴史認識を構築し、ひいては日韓の人々の文化的な相互理解に寄与する。</p>	

成果報告書

記入日 2014 年 4 月 20 日

氏名 平野 鶴子	留学先国名 大韓民国	所属機関 東京大学大学院人文社会系研究科
研究テーマ： 植民地期朝鮮における衣生活の近代化		
留学期間： 2012 年 3 月 ～ 2014 年 2 月		
<p>【研究の成果】</p> <p>私はこれまで日本の植民地統治が朝鮮の社会と人々の日常生活にどのような影響を与えたのかという問題関心から、衣生活をめぐる社会変化に関する研究を進めてきた。つまり、当時の人々がどのような衣服を着ていたのか、そしてそれはなぜなのかということについて、政治、経済、文化などの様々な脈絡において読み取ることである。留学中は、文献資料の収集及び分析と並行して聞き取り調査を行ったが、中でも色衣奨励運動に関する分析に力を注ぎ、その成果の一部について論文を発表することができた（平野鶴子「植民地期朝鮮における色衣奨励 - 染色講習会の展開過程の分析による基礎研究 - 」『東北アジア文化研究』第 38 集、東北アジア文化学会、2014 年 3 月）。具体的な研究内容は次の通りである。</p> <p>まず、色衣奨励運動とは 1920～1940 年代において生活改善を主たる目的として実施され、白衣廃止とそれに代わる色衣着用の普及を目標に掲げ、宣伝、講演などの様々なキャンペーンを通じて推進されたものである。</p> <p>色衣奨励に関する先行研究は多くないが、はじめて本格的に白衣弾圧と色衣奨励を社会史的に扱った研究は、コン・チェオク(2006)によるものである。同研究では、白衣弾圧の手段としての宣伝活動(講演会、染色講習会、街頭行列、ビラ配布など)と白衣着用者への制裁とそれに対する抵抗について論じている。このコン・チェオクの研究に基づき、資料を補いながらより綿密な分析を行ったのが趙熙真(2010)である。対象時期を拡大して分析を深め、誘引と強制策の実行主体の役割を解明している。しかしながら、以上のコン・チェオク(2006)と趙熙真(2010)の研究においては、色衣奨励の強制性を強調するあまり、色衣奨励運動に対応する朝鮮人の行動を「抵抗」や「反発」に収斂させてしまっている。確かに色衣奨励運動における強制的な事実はあるとしても、それだけをもって色衣奨励運動を評価しては当地の人々の多様で動的な対応を捉えることができなくなってしまう。そこで私は色衣奨励が展開される過程においては、染色講習会に際して各邑面から選出された受講者が講師として養成され、彼らが染色技術の普及を担ったという事実が存在することに着目し、色衣奨励運動は、官から民に一方的に推進されたにとどまらず、啓蒙の対象者が運動の担い手となることによってさらなる広がりを見せたことを前掲拙稿において指摘した。</p>		

色衣奨励運動は、主に経済上の弊害を取り除くという目的意識から、朝鮮人の白衣着用を廃止し、それに代わる染色の施された衣服の着用を奨励しようとする動きである。経済上の弊害とはすなわち、白衣は頻繁に洗濯を行う必要があり、その都度仕立直しをしなければならないため、これに費やされる婦人の労力が多大であるという点、また洗濯を頻繁に行うため服地を損失しやすく、これを補うための費用を多く要する点、などの経済的損失が挙げられる。

色衣奨励は、1920年代より各郡面、学校、農会、その他矯風会などの各団体の主催により推進されたが、とりわけ農村振興運動の展開された1932年以降に本格化する。農村振興運動は、農村経済の疲弊した当時の朝鮮半島において、農村経済を更生するために宇垣総督により推進された一連の運動であるが、その実践事例の一つとして「色服の奨励」が掲げられたのである。

色衣着用の奨励は、冠婚葬祭費の節約、断髪励行、迷信打破、ゴム靴廃止、温突改良、禁酒禁煙といった生活改善に関する実施項目のうちの一つであるが、各道ごとに示される「農山漁村振興計画の実施概況」によれば、朝鮮全13道のうち10道において色衣奨励が実施項目として掲げられている。色衣奨励は、前述の生活改善に関するその他の実施項目に対し最も多くの道で実施されていることから、生活改善における最重要課題であったと言えよう。

色衣奨励の具体策は、色衣着用促進会の設置、宣伝週間の制定、染色その他の色服着用に関する印刷物配布、講演会及び染色講習会の実施、共同染色所の設置、染料の共同購入又は指定染料販売店の設置、官公吏又は各種学校の生徒児童の色衣着用の率先などである。

このうち、色衣奨励運動の中心的な役割を担った染色講習会の展開過程について、当時の主要な新聞媒体であった『毎日申報』『東亜日報』『朝鮮日報』3紙の関連記事の分析を行うことで、講習会の実施時期や地域分布について統計的に明らかにするとともに、講習会の実態について綿密に検討を行った。

染色講習会の特徴について概観すると、講習会では実地演習を通じて染色法の教授が行われると同時に指導者の養成が行われた。講習会の主催は、主に道、府、郡及び道産業課や道勸業課、社会課などの行政機関によるものが主であり、農会、教育会、矯風会、振興会、金融組合、青年団、郷約会、婦人会などの各種団体によるものも多数見られる。また、各新聞社主催の講習会も開催されることもあり、名実ともに官民一体となって推進されたと言えよう。講習場所は、郡庁、府庁、面事務所、普通学校、郵便局庁舎、市場、公園などの人々が集まりやすい公共の場であった。

前記3紙に掲載される染色講習会の関連記事は、合計338件であり、その内訳は『毎日申報』187件、『東亜日報』104件、『朝鮮日報』47件となる。それらの記事から、開催地と開催日ごとに事例を抽出し整理すると、1922年から1940年にかけて実施された染色講習会は504件に上ることになる。さらに、各講習会は数日間にわたって数カ所で行われることがほとんどであるが、それらを便宜的に1日につき1回、一つの開催地につき1回と計上した場合、2690回の講習会が開催されたことになることが分かった。

時期分布を見ると、染色講習会は特に1932年から1936年まで盛んに開催されており、これは農村振興運動が行われた時期に一致している。前述のとおり、色衣奨励は農村振興運動において実施された生活改善に関する実践課題の一つであった。色衣奨励は、1920年代から1940年代にかけて継続的に推進されたが、特に農村振興運動期に盛んに実施されたことが示される。すなわち、20年代初めより色衣奨

励の一環として染色講習会が実施されていたが、農村振興運動の始まりとともに色衣奨励そのものがより盛んに推進されるようになり、染色講習会がその具体策として中心を担ったこと、さらには農村振興運動が進むにつれ染色講習会の実施規模が減少傾向を示すものの、その背景には色衣奨励の推進方法が多様化していったことが窺える。それを裏付けるように、1930年代中盤には各地において共同染色所の設置が進められたという事例が報告されている。

また、前記3紙に掲載される染色講習会の事例は全504件であるが、そのうち149件においてのみ講習会の参加人数を知ることができる。それらの人数を合計すると約32,000名となる。染色講習会は指導者の養成も目的としており、その受講者が後に当地において自ら普及活動を担ったことから、その波及効果は大きなものであったと考えられる。

とはいえ、染色講習会の実施状況における地域的差異をはじめとして、色衣奨励の浸透の度合いは必ずしも一様ではなかったと思われる。その背景を具体的に明らかにすることにより、染色講習会が当時の朝鮮の人々の生活と社会に及ぼした影響について分析を深めることが今後の課題である。

また、染色講習会は色衣奨励運動のあくまで一部であり、以上のような分析結果をもって色衣奨励を全体的に評価できるものではない。しかしながら、前掲拙稿で明らかとなった、人々の自覚を促すための様々な啓蒙活動が行われたという事実と、これまでの研究でも明らかにされてきた制裁や暴力を伴う強制的な方法でも推進がなされていた事実という二つの側面、言い換えるならば、啓蒙と強制という相反する要素をあわせて解析していくことにより、色衣奨励運動の全体像の解明に繋がるであろう。

このような論点にも留意しつつ、さらに白衣廃止と色衣奨励に関する当局と朝鮮知識人による言説の通時的な分析を補い、また、染料や染織布の流通などについて分析を行うことで当時の朝鮮社会における衣生活の歴史的な位相について明らかにしていく。

【留学全般についての感想】

この2年間は、はじめての留学ではなかったとはいえ、新鮮な驚きに満ちた時間でした。過ぎてみるとあっという間のようなのですが、帰国後のふとした瞬間にここが韓国ではないかという錯覚を覚えたり、とっさに日本語が口から出てこないことは、私が韓国という地で必死に生きたことの証だと思えます。留学中には、課程に所属しなかったということもあり、全ての時間を自身の研究に費やすことができました。一方で、常に自身の研究と真正面から向き合わなければならず、苦しい時間もありましたが、多くの友人や若手研究者たち、先生方の支えにより、かけがえのない留學生活となりました。心から感謝しています。

私が留学した2012年から2013年は、それまでの日韓の友好ムードに比して政治的な緊張感が高まってきた時期でした。現地では、日本の政治家の発言や軍事的な動向などが頻繁に報道されるようになり、韓国国民の反日感情の高まりが心配されました。そのような状況もあってか、現地の協力者を伴わない聞き取り調査はかなり難しく、ひどい場合には門前払いされたこともありました。また、植民地時代のことを教えて欲しいという申し出に対して、自身の「正しい」歴史認識を教えようとする人もいました。特に、個人ではなく集団に対するインタビューでは苦勞しました。インタビューの方法に問題もあったと思いますが、日常的な、ある意味ありふれた経験を聞き出したいというこちらの意図とは裏腹に、彼らは語るべきネガティブなエピソードから話しはじめました。一方でポジティブな話をしようとする人

の声を遮るように、どれほど当時は苦勞したかを熱心に話される人もいました。私自身の研究テーマが、日常生活に関するものであるため、彼らの「当たり前」の経験を聞き出そうとするのですが、なぜ私がそれを聞くのかについて理解できないといった態度を取る人もいました。回数を重ねたからといって、必ずしもインタビューがうまくいく訳ではありませんでしたが、こちらの意図しなかった語りの中にも沢山の気づきと驚きがあり、このような経験を通じて日本人である私が植民地期朝鮮の研究をする上での限界と強みについて考えさせられました。

また、2年間の留學生活のうち、一年目はソウルに、二年目は釜山に滞在することができたことも、研究をする上で大変恵まれていました。ソウルではソウル大学の奎章閣に訪問学生として所属していましたが、ソウル大國史学科の近代史専攻の学生たちによるセミナーでの議論や討論には大いに啓発されました。また、二年目には釜山の釜慶大学の文化融合研究所に特別研究員として所属しました。同大学には近代史専攻の研究者は少なかったのですが、近隣大学の院生や若手研究者が集まる勉強会に参加することができました。釜山に一年間滞在することにより、それまで無意識に「日本」に対し、韓国＝ソウルという認識にあったことに気づき、ソウルを相対化すると同時に韓国社会をより立体的に捉えることができるようになったのではないかと思います。

帰国前に全羅道を訪れたことも大変印象に残る経験となりました。全羅南道の谷城には、1930年代に建設された鉄道の駅舎が現存していますが、その駅舎の周りには農村地帯が広がり、まるで当時の空間がそのまま再現されているかのようでした。そのため、当時の農村社会に近代文明が現れるという事態を追体験したような気持ちになりました。これが事実と一致するかどうかということではなく、当時の様子を想像するというに意味があるのだと思います。その他にも、韓国各地の近代建築や近代的町並みなどの景観を見学する旅行に度々出かけましたが、これを重ねたことで植民地期の朝鮮の町並みや人々の営みについてのイメージがクリアになっていきました。

私の研究は、植民地期朝鮮の人々の生活そのものをテーマとしていますので、韓国における生活体験や見聞するあらゆることが、それらを再構築する材料になりうるのだと考えます。そういった意味でも、この2年間という留學生活は私の研究人生において大きな財産となりました。最後になりましたが、このような機会を与えて下さり、長い間ご支援くださった財団の方々に心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。



旧谷城駅前にて韓国の親友と（全羅南道）



北村韓屋マウルにて（ソウル）



ソウル城郭の北大門近くにて



クリスマスの富平市場(釜山)